

新しい動物公園づくり

戦後すぐの1950年に誕生した県立児童動物園は、その後、秋田市に引き継がれましたが、1969年の市制80周年の新しい公園計画により、「こどもの国」としての大森山公園へ移転し、1973年に公園と動物園が誕生しました。

市民の声を取り入れ、市制100周年記念事業の一つとして、1991年にゾウとキリンを導入しました。1997年には「ふれあいランド」が完成し、現在の動物園のカタチは開園から約25年の時を経てできあがりしました。

開園後、30年を経過すると施設の老朽化とともに動物や動物園に向けた社会の意識も大きく変わり、ハードの再整備の動きが少しずつ始まりました。

それに合わせ動物園の様々なソフト的な活動も活発化し、動物園について多くの人が考えるようになり、それは2005年の「大森山動物園条例」の制定に結びつき、動物園の存在意義を内外に示すことになりました。

2007年には秋田出身の作家、西木正明氏のコーディネートで各地の動物園長、経済学者、生物学者、子育て中のお母さんが参加し「地方(秋田)の動物園を考える」シンポジウムを開催し、それは2009年の市民参加型の「大森山自然動物公園整備構想策定委員会」に発展しました。2010年3月に市は「大森山自然動物公園(仮称)整備構想」を発表、1969年の大森山公園

建設計画から約40年が経過し大森山公園と動物園が融合した自然動物公園の考えに発展しました。

コンセプトには自然との調和、市民とともに成長し続ける自然動物公園への願いが込められています。アートも取り入れ、市民や企業とともに発展させながらの再整備という新しい考え方も盛り込まれましたが、「こどもの国」に盛り込まれた「人間形成の場」の思いはアンカーのようにどっしりと残っています。構想は2017年に改定され、2021年7月には「大森山公園整備基本計画」に具体化され、少しずつですが、自然動物公園への思いを広げるために整備が始まっています。

計画の内容は市内が一望できる展望台から豊かな自然の森の中に遊び、大森山に生息する生き物たちを間近に観察しながら公園を楽しむ工夫がこらされ、動物園を核にして、自然豊かな公園と動物園の往来や回遊を楽しんでいただこうとするものです。

現在、公園との回遊性づくりの第一歩として動物園の南端から公園に入り込むアプローチ園路の再整備が始まり、大森山公園の自然と動物園の往来、回遊を象徴するゲートの整備も計画されています。

自然の中、遊びながら動物とふれあえる全国でもユニークな「大森山自然動物公園(仮称)」を次世代の人々の手で完成してほしいものです。その名称も新しい秋田の文化を象徴するもので動物園という言葉に固執する必要もないと思います。市民みんなで考えてもいいかもしれません。



大森山公園の空撮写真(中央の白い建物が動物園ビジターセンター)